

絵本部会通信 2号

2016年2月29日

「テファリキと絵本」

宮地敏子

創刊号と同じ日付で2号です。この絵本通信には、会員になられた皆様の投稿をできるだけ載せ、投稿規定や紙面構成も共に整えていきます。当面、投稿者名を明記すること。文章は子どもと絵本に関すること。A4で1枚程度はいかがでしょうか。インターネット通信は、今のところ不定期の予定です。

まず世話人から、2月5日から11日に学会主催のオークランド施設見学に参加した報告をしてみたいと思います。4月に発行される学会報には木村敬子海外研修委員長の報告がございますので、ここでは見学した4つの施設の、絵本をめぐる感想を述べます。お付き合いください。

ご存知のように「テファリキ」はマオリ語で敷物の意味。経糸緯糸が多様な糸で編まれている乳幼児保育の指針のようなものです。始動して20年経ちました。子ども自身が力をつけること・全人的成長・家族と地域の中で育つ・関係を繋げることという4つの原則と、子どもの健康と幸福・Contribution(日本語の適訳難しいです)・体験による探求・子どもの持って生まれた個性・共創的対話力という5つの要素で編まれています。ラーニング・ストーリーという日本の園の連絡帳プラス制作図録の拡大版が、一人ひとりの子ども毎にファイルされていて、4歳の終わりの卒園時に渡されます。私は、子どもを真ん中に置いた親と先生の協働の記録にける日々の労力に驚嘆しかつ心配して見学したのですが、すでに優れた(?)アプリがあり、家庭ともメールで頻繁にやり取りしているところもありました。

シュタイナー、モンテッソーリ、レジオ・エミリアの教育も取り込んだと説明を受けました。自然および人間、また人種間の多文化共生を企図するテファリキですが、国という枠組み、若者の自殺率の高さ、頭脳流出の実態や環境設定における各園の経済格差を目の当たりにすると、未来に向け人間の欲望という厳然とした壁をどう乗り越えるのかを考えさせられました。

絵本はといえば、どの園にも絵本の開架棚がありました。先ほどのテファリキと絵本はどのように結びつくのだろうか。どんな選書がなされているのだろうかと興味津々でした。5歳の誕生日の翌日からばらばらに小学校に入学し、読解力に非常に力を入れていて、個々の能力に応じて、先生が絵本(テキスト)を課し、家で親の前で音読してきて、順次難しいテキストになっていくという下調べの知識を、質問では確認しましたが、各園1時間あまりの見学でしたので絵本活用の実態はよくわかりませんでした。マットタイムで一斉に読んでいる園もあれば、補助の先生が一人の子どもが持ってきた絵本を読んでいるうちに他の子どもが参加するという場面にも遭遇しました。

子どもにカメラを向けるのは厳禁でしたが、壁面や設置物は許可されたので、絵本をたくさん撮り、帰国してから拡大して、分析してみようと考えました。結論からいうと、選書も、設営も、活動もテファリキそのもの。実に多様な絵本がどのコーナーにも混然とあり、子どもと絵本を繋ぐ力が保育者には必要なのだと思いました。ファースト・ブックから物語絵本まで、科学絵本も、自己肯定感を感じさせる様々な人との出会いの絵本も、在園する子どもの母語の絵本(マオリ語韓国語日本語など)やそれぞれの昔話も編み込まれた絵本の豊かなカオス。大人主導で細分化し分類して提示するより、一人ひとりの子どもの学びの芽がここでも第一に尊重されているのでしょうか。

つぶやき、ご意見などお寄せ下さい。連絡先: iaeceehon@gmail.com

(※迷惑メール対策で「@」の部分で「O」にしてあります。「@」に直してお送りください。)